



# 第 1 日

## 国 語

(9 : 30 ~ 10 : 20)

### 注 意

- 1 検査開始のチャイムがなるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙は表紙を入れて6ページあり、問題は一から三まであります。これとは別に解答用紙が1枚あります。
- 3 問題用紙と解答用紙に受検番号を書きなさい。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

受検番号	第	番
------	---	---

一 次の文章には、昭佳が、近所に住んでいる作太郎（じいちゃん）の家に行き、二人で馬（ふぶき・いかずち）の世話をしているときのことが描かれています。この文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

「じいちゃん、ふぶきといかずちに水やつてもいいか。」「ああいいとも。頼む。」「うん。」沢から水を引いた井戸が、家の正面にある。昭佳はバケツを持つて、井戸に水くみに行つた。水をのませるのも、前になん度かやらせてもらつていた。これは昭佳にとって、なかなかやつかない仕事だつた。水は重たいし、チャプチャプこぼれるから注意がいつた。両手でふぶきの前までバケツを運ぶと、「ヨッシャ。」といつて、作太郎が木の箱から立つた。そして、バケツのつるを両わきからふたりで、「セーノ。」と持ち上げ、バケツごとかいばおけの中に入れた。ふたりで声をそろえて持ち上げるのは楽しかつたが、もう少し背が高いが、もう少し力が強ければ、ひとりでできるのだがと思うと、昭佳は少し残念だつた。

ふぶきは、バケツにすぐ鼻をつつこんで、ゴクリゴクリとのんだ。バケツの水かさがスー、スーと減つて、いつぺんにからになつた。「んまいべ。よし、もうなくなつたぞ。もう一回くんできてやつから。」ふぶきも、いかずちも、バケツの水を二はいづつのんだ。昭佳はうづすら汗ばんできた。少し疲れたが、ひと仕事したのが得意だつた。「まず、こさすわつて休め。」と、作太郎が席を開けてくれた。「じいちゃんすわつてろ。おれは、あそごの方がいいや。」昭佳は奥にうずたかく積

んである、乾草やわらのところに行つて腰かけた。乾草のにおいがブーンとした。奥にある台の上にはくらが二つ置いてあつた。くらを見ながら、昭佳は乾草によりかかつた。疲れがストップと、とれていく気がした。それといつしょに、昨年の冬のことが、まるで映画のようにはつきりと、頭の中にうかんできた。

二月の終わりごろだつたろうか。雪がふつていた。ふぶきの背中にはぐらがついていて、ぐらの後ろには左右に、乾草の束が積んであつた。作太郎が馬に乗つてゐるところを、昭佳は、その時初めて見た。日ごろ、南天のつえを手ばなせない作太郎とはうつて変わつて、馬上の作太郎は別人のようだつた。背筋はまっすぐにのび、顔つきが a 引きしまつてき然としていた。「ハッ」と、足で合図を送ると、ふぶきは歩きだし、歩速に合わせて作太郎はたくみにリズムをとつた。その作太郎の後ろに、昭佳は乗せてもらつたのだつた。

作太郎の馬は、ふぶきといかずちだけではなかつた。山にある昔の放牧場跡には、十数頭の馬が、半分野生になつて生きていた。放牧場といつても、今では雜木の林になつてゐるところだつた。馬たちは、木の皮や、雪をほりおこし、クマザサやススキを食べて、① 飢えをしのいでいるのだつた。エサの一番とぼしい季節<sup>②</sup>になると、作太郎が乾草を持って行き、やつてゐたのだ。雪の中をふぶきは、作太郎にみちびかれながら進んでいった。「ホツ、ホツ、ホツ。」時どき、作太郎がふぶきをはげますように声をかけた。昭佳は初めて馬に乗り、落ちそうで作太郎の背中にしがみついていた。三十分もそうやつて山を登ると、ふぶきを歩

かせながら、作太郎が右手を口にやつて叫んだ。「ホーイ、ホーイ、ホーイ。」

よく通つた声は、四方の山に響いた。南の斜面に向かつて、作太郎はまた叫んだ。「ホーイ、ホーイ、ホーイ。」作太郎の腰にまわした手がしびれるように冷たかつた。ほおをなでる風も、切るようにいたい。しかし、昭佳はこの声をきくと体のしんがカッと熱くなつた。昭佳は、作太郎が馬をよんでいるんだなど、すぐにわかつた。

まわりの山ひだを見まわしてみても、雜木の林がつづいているだけで、何も動くものはない。冷たい雪の中で静まりかえつていて。「ホーイ、ホーイ、ホーイ。」しばらくすると、ボキボキッとなにかのおれる音がした。そして音の方から一頭の茶色い馬が現れた。すると、その後ろから馬の一群が走つてきた。雪を蹴ちらし、ペシペシ小枝をおりながら、馬の群れはどんどん近づいてきた。昭佳は背中がサーッとあわだつた。馬たちは、なん十メートルかの距離<sup>④</sup>をたち、ふぶきの速度に合わせてついてくる。作太郎が馬たちをじつと見ていた。昭佳は胸がしめつけられるような思いで、この光景を見ていた。「ドオ、ドオ。」ふぶきはピタリと止まり、作太郎が雪の上にb<sup>3</sup>をまいた。そして、すぐに作太郎はふぶきに乗ると、そこをはなれた。昭佳は、この出来事で、初めて作太郎という人に出会つた気がしたのだつた。

(最上一平「広野の馬」による。)

その記号を書きなさい。

ア カラリと イ スラリと ウ キリリと エ サラリと

3 b<sup>1</sup> にあてはまる最も適切な語を、文章中から漢字二字で抜き出して書きなさい。

4 昭佳は少し残念だつた<sup>2</sup>とあるが、どのようなことに対しても、昭佳は残念だと思つたのですか。二十字以内で書きなさい。

5 歩速に合わせて作太郎はたくみにリズムをとつた<sup>3</sup>とあるが、この作太郎の様子と対照的な昭佳の様子を表している一文があります。その文のはじめの五字を抜き出して書きなさい。

6 昭佳は、この出来事で、初めて作太郎という人に出会つた気がしたのだつた<sup>3</sup>とあるが、次の文章は、昭佳のこの気持ちについて述べたものです。空欄Iにあてはまる最も適切な表現を、文章中から十五字以内で抜き出して書きなさい。また、空欄IIにあてはまる適切な表現を、二十字以内で書きなさい。

馬を呼ぶ作太郎の声を聞き、その声に応じて馬が来ることを予期して、昭佳は(一)I<sup>3</sup>。そして、実際に馬の群れが近づいてくる様子や、馬たちを見つめる作太郎を見て感動した。これらのことを通して昭佳は、(二)II<sup>3</sup>が分かつたという思いに至つたのである。

- 1 ①~④ の漢字の読みを書きなさい。  
2 a にあてはまる最も適切な語を、次のア~エの中から選び、

二 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

最近の映画館では、「最初から最後まできちんと観る」という①シユウ

ウカンが定着していて、休憩時間にしか入場させないというところも多い。以前はもつと緩やかだった。繰り②カエし映画が上映される間、いつでも入れる、という映画館がほとんどだった。

私が子どもの頃、よく行っていた映画館も、いつでも入退場できた。学校が休みの時期など、ゴジラやモスラなどの怪獣映画がかかつて、仲間たちと観に行つた。子どものことだから集合時間もいい加減で、ずっと楽しみにしていた目玉の作品でも、平気で途中から入つていた。

ストーリーが進んでしまつていて、重要な伏線や端緒がわからなくて

も、a。そして、一回目の鑑賞時に最初から観て、「そうか、あの事件はそういう理由で才<sup>オ</sup>きていたのか。」「犯人はみんなふうに証拠を隠したのか。」などと頭の中でつないで、それなりに満足していた。映画のストーリーについて言えば「タイム・トリップ」をして

いるようなものだつたが、それでも<sup>④</sup>カマわなかつたのである。

入場した時に流れていたシーンになると、「ここから先はさつき観たから、もういいや。」と席を立つせつかちな仲間もいたが、私はどちらかと言えば、もう一度最後まで観て、味わい尽くすのが好きだつた。ポンコーンやポテトチップスを食べながら、仲間とわいわい楽しく観たあの頃が懐かしい。

映画を途中から観て、二回目でそれをつなぐ。昔の映画館に行つてい

た人ならば、誰でも経験していることなのではないか。作品としての映画をきちんと楽しもうと思ったら、やはり最初から鑑賞すべきだ。随分いい加減な時代もあつたものだと思う。

b、人間の脳の働きという視点から見ると、当時の「乱暴な」映画体験にはなかなか味わい深い側面があるのも事実である。

映画は編集、整理された情報である。それに対して、人生の中の「生の体験」には、編集、整理されて、ある特定の意味に解釈される前の様々なノイズが入つている。そのような乱雑さこそが脳を育てる栄養になる。映画を途中から観てしまい、二度目にストーリーをつなぐ。無茶なようでいて、その雑な体験の中にこそ、私たちの脳を育む大切な滋養があるのである。

現代の生活の中で私たちが受け取る情報は、ともすれば整理され、丁寧に表現され過ぎているのではないか。いつの頃からか、テレビにおける発言には、必要以上にまとめられたテロップが付けられるようになつていて。映画のストーリーについて言えば「タイム・トリップ」をしている。ノイズが入っているものの中から意味を拾うというのが人間の脳の強靭な編集力の本質。最近の至れり尽くせりの情報環境では、脳の潜在能力を活かすことができない。

ところで、「一時停止ボタン」で好きな時に映画を止め、こまぎれに観ることができるのはDVDと違つて、映画館の場合は、私たちの都合で「一時停止」できない。映画がそのような形で上映されることは、映画という体験において大きな意味を持つている。

大ヒットした携帯型ゲーム「たまごっち」の開発者として知られる横

井昭裕氏にお目にかかつたことがある。「たまごっち」は、ペットを育成するゲームだが、モニターの段階で要望の多かった「一時停止ボタン」を横井さんは敢えて付けなかつたのだという。「一度始めたら、こちらの都合で一時停止などできない」ということが、ペットの本質だと考えたからです。」と横井さんは言う。

考えてみれば、生命の本質とは、停止することのない綿々とした流れである。こちらの都合でストップしたり、再び開始できるものではない。だからこそ □c の世話は面倒なのだが、それゆえに愛しい。

子どもの頃、暗い映画館に入り、もうすでに始まっている映画を目にしてはいる。〔茂木健一郎 「それでも脳はたくらむ」による。〕

ウ 気になつて映画を味わえなかつた  
エ 気が抜けて映画を楽しめなかつた

- 3 □b にあてはまる最も適切な語句を、次のアーエの中から選び、その記号を書きなさい。
- ア その一方で イ 以上のことから  
ウ そのためニ エ なぜがといえば  
エ その一方で イ 以上のことから  
ウ そのためニ エ なぜがといえば

4 □c にあてはまる最も適切な語を、文章中から三字で抜き出しで書きなさい。

5 次の表は、筆者が子どものころの映画館と最近の映画館での映画鑑賞について、筆者の主張を整理したものです。この表の空欄d・eにあてはまる適切な表現を、空欄dは二十字以内、空欄eは十五字以内でそれぞれ書きなさい。

		映画の見方		その見方のよい点
子ども	途中から観て、二回目に			
のころ	ストーリーをつないで観る。			d
e				
		映画を作品としてきちんと楽しむことができる点。		

- 1 ①～④のカタカナにあたる漢字を書きなさい。  
2 □a にあてはまる最も適切な表現を、次のアーエの中から選び、その記号を書きなさい。  
ア 気のすむまで映画を味わつた  
イ 気にせずに映画を楽しんだ

6 この文章において、筆者は、DVDとたまごっちを例にあげて、現代の私たちのどのような問題について述べていますか。五十字以内で書きなさい。

三 次の文章を読んで、あとの問い合わせに答えなさい。

木下何某の領分在邑の節、領内を一目に見晴らす高棲ありて、夏日近  
領地の村里にいたとき

臣を打ち連れて右樓に登り眺望ありしに、はるかの向かふに大木の松あ  
りて、右梢に鶴の巣をなして、雄雌餌運び養育せるありさま、雛も余

程育ちて首を並べて巣の内に並べるさま、遠眼鏡にて望みしに、ある  
なり、右梢に鶴の巣をなして、雄雌餌運び養育せるありさま、雛も余  
りて、右梢に鶴の巣をなして、雄雌餌運び養育せるありさま、雛も余

(注) 何某 || 人の名がはつきりしないが、または、わざとほんやり  
といふときに用いる語。

しごとく空中を立ち帰りしに、親鶴程なく立ち帰りて雌雄巣へ戻り、  
雛を養ひしとなり。鳥類ながらその身の手に及ばざるをさとりて、同  
じうことである 手に負えない

類の鶩を雇ひ来たりし事、鳥類心ありける事と語りぬ。

知恵

(「耳囊」による。)

時右松の根より余程太き黒きもの段々右木へ登るさま、うはばみの類ひ  
大蛇

なるべし。「やがて巣へ登りて鶴を取り喰ふならん。あれを制せよ。」

と、人々申し騒げども詮方なし。然るに二羽の鶴の内、一羽は蛇を見付  
けし体にてありしが、虚空に飛び去りぬ。「あはれいかが、離は取られ  
ん。」と手に汗して望み眺めしに、最早かの蛇も稍近く至り、あはやと  
思ふ頃、一羽の驚はるかに飛び来たり、右の蛇の首をくはへ、帶を下げ  
その

1 遠眼鏡にて望みしとあるが、このとき、親鶴はどのようなことを

していましたか。現代の言葉で、十字以内で書きなさい。

2 あれを制せよとあるが、どのようなことを阻止せよと言つている  
のですか。現代の言葉で、十字以内で書きなさい。

3 立ち帰りしにの主語は何ですか。次のアーワークの中から適切なもの  
を選び、その記号を書きなさい。

ア 親鶴 イ 雛 ウ 蛇 エ 鷺

4 餌ひしのひらがなの部分を、現代かなづかいで書きなさい。

5 鳥類心ありける事と語りぬとあるが、鶴のことを知恵があると語  
つたのは、蛇を見付けたときの鶴の行動をどのように解釈したからで  
すか。現代の言葉で書きなさい。